洞上古轍における五位の性格

――偏正五位を中心として――

石附勝竜

一　はじめに

洞上古轍は中国曹洞宗に属する鼓山永覚元賢和尚（一五七八―一六五七）により明永暦元年（一六四七年）に著作出版され、我国では延宝元年（一六七三）に京都林伝左衛門により梓行されている。

此の書は曹洞五位の復古を意図したものであるが、日本では五位の本義復興を目指す江戸期曹洞宗の天桂（一六四八―一七三五）・洞水等の和尚からは臨済的偏見・誤解の典型として、臨済宗の大慧宗杲和尚（一〇八九―一一六三）等の五位説曲解と全く同類であると難ぜられて現在に至っている。

しかし著者永覚自身は中国明代の臨済一色にぬりつぶされた中で、曹洞宗義復古の旗幟をかかげて宣揚し、周囲からも宗義復興の偉傑と仰がれている人であり、恰も宗義復興期に当った我国江戸初期では、独庵玄光（一六三〇―一六九八）や梅峯竺信（一六三三―一七〇七）等の宗統復古に重要な役割をなした方々に大きな影響を与え、その殆んどの著書が中国刊行後幾千ならずして我国に印版されている程の人であることはその五位説の真実態を探るには重要であると思われる。

果せるかなその五位法門を仔細に見てくると、在来の臨済宗的取扱いとは異なる曹洞門の綿密な宗旨を反映していると思われる面がうかがわれる。よってこれを考究することは、単に永覚が中国人であることから明代の中国曹洞禅の自覚の把握に意義があるのみならず、その影響をうけている我国江戸初期宗統復古時の曹洞禅の自覚の内容の点検に役立ち、更に江戸中期以後の日本曹洞宗の宗門内のみの宗学の展開の傾向に対して広い視野を与えてくれるものであると思われる。

さて五位法門といえば通常偏正・功勲・王子の三種の五位が代表としてあげられるが、洞山悟本大師（八〇七―八六九）

の直説として仏道修証の重要な二面を端的にのべたものとしては、偏正五位と功勲五位とがあげられよう。この故に五位を云々する場合、この二種の五位を常に兼ねてみなければならない。というのは宗門では従来五位を討究するのに、主に偏正五位のみを以てし、臨済宗は洞門の偏正五位を功勲的段階的に解釈するといって批難しているけれども、しかしそれは済門が、証の面は余りいわぬのが本来であり、修の面に力点をおいてすべてを功勲的に解する傾向があるからなのであり、もしその功勲的解釈が洞門の功勲と同じかったならば単に偏正の語の受取り方が異なるのみで、もはや比較の対象ではなくなるからである。

けれどもここでは頁数がないから、右の意味を含めて偏正五位の説を中心にしてみていきたい。ついては洞門五位の本義としては従来認められているもので偏正については洞山の五位顕訣並に曹山の揀を、功勲については洞山語録の功勲五位を、臨済的解釈としては大慧宗杲和尚（一〇八九―一一六三）著正法眼蔵中のものと、永覚と同時代の同じく臨済宗で臨済宗義宣揚者として著名な天童朝宗通忍和尚（一六〇四―一六四八）の語録中の偏正・功勲説とを比較の対象としてのべていきたい。

所で古轍自身は当時の資料の不足からきた一般的傾向として、曹山の逐位頌を洞山頌と誤ってそれに註釈をしているが、頌の内容は異ならずといわれ、古轍も自己の註を偏正の本義としているから、そのまま比較していきたい。

二　五位各位の復古内容

正中偏・偏中正について　永覚は古轍で

正中偏。就下初悟二此理一時上立。理是正。悟是偏。……師家多作二体中発レ用釈一者、非レ是。以下洞山意。是正中便有レ偏。非中正後起ヒ偏詳二洞曹二頌一。……

偏中正。就二見道後用レ功時一立。功勲偏也。所レ奉之理正也。……此位由二奉重之力一。所レ見更親二於前一。但不レ能三親造二此理一。則所レ認亦祇在二影象之間一。……此位師家多作二転レ用帰レ体釈一者。非レ是。以下洞山意是偏中有レ正。非中偏後帰ヒ正也。

すなわち正中偏を初めて此の理を悟る時についてたつ、として事偏なる悟を強調している。そしてこれは初歩の見道位であり、偏中正はこの悟・偏を功勲的修道的に奉重してゆく位であり、理には究極的には至っていないけれども、偏・悟の内容は理・正であるとするもので、明らかに功勲五位的な向・奉にあてはめてみているものである。（かくしてその功勲は前述の如くまったく洞山下のものではなくて、明かに臨済門的傾向のものではあるとされたのである。

しかし正中偏・偏中正で正偏を体用と解し正中偏を体用を

発す、偏中正を用体に帰すと理論的回互に解するは体用隔別説で、洞山の正偏相即の本義ではないともしている。

ここで第一に問題となるのは、古轍が偏正五位を功勲五位的にみていることである。では全く功勲的かというと、偏正五位の外に功勲五位も説き、「功勲五位は偏正五位中の偏位」だといっているから矢張り偏正五位は禅法の基本的組織ともみているわけでありこのことは大慧や朝宗にもみられる。この基本的性格の故に済門系の偏正五位の対照としては曹洞系の偏正五位と功勲とを一緒にみなければならぬということになるのははじめに一寸ふれておいたとおりである。

其で古轍は済門的だとの批難があることから、この二位を済門と比較してみると、済門の大慧や朝宗は実際に古轍で難ぜられた体用説的教学的な理事相互回互の無礙強調による正位到達を目的とする説であるが、実はこの本体・作用隔別説は、宋淳熙戊甲（一一八八）刊の済宗の晦巌智照による『人天眼目』で現われてくる説であり、大慧や朝宗はその影響をうけたものであろう。古轍はこれを厳しく批判し綿密な正偏相即偏位重視の宗乗を打出そうとしているといえよう。

ここで本義たる顕訣揀をみると、偏正五位は「明ニ功進修之位一」ものではなく、「祇明ニ従上物体現前一」ものであるとして、功勲的なものではなく、法としてのもののあり方をあかすものとしている。しかしさりとて済門の如く教学的な理事の回互で終るのではない。即ち顕訣で正中偏を「正位郤偏。就レ偏弁得。是円ニ両位一。」偏中正を「偏位雖レ偏。亦円ニ両意一。縁中弁得。是有語中無語。」としていることよりすれば、正中偏とは正が偏で表わされること、偏中正は偏に正が表わされることで、共に偏・縁中での弁得・円成が強調されていることで、洞門宗旨の傍提的性格が示されているものである。

この上から古轍が偏・悟を重視しているのは、大慧・朝宗等が理事の回互の中で正を中心にして、その現われを中心にみて、事的差別に拘わらぬのを強調しているのに対すれば、より洞門的といえよう。しかし理から一般的事への悟の功勲的段階的面を特に強調していることは、洞山の功勲五位が向が具体的な事に尊貴の理を現わすこととし奉がその尊貴を更に滅してゆくことであるとしていることに比すると、矢張り済門的であるといえよう。否全体を功勲・悟でぬりつぶしている所は、済門よりも徹底して功勲的であるとさえいえよう。

正中来について　これを古轍は

正中来一位。即是得ニ法身一。亦即是正位。前半分是転レ功就レ位。後半分是転レ位就レ功。中間即尊貴位也。無中正位也。有レ路来偏也。隔ニ塵埃一者以ニ其内方転レ身。尚未レ入レ俗。与ニ塵埃一隔也。有下作レ出ニ塵埃一者上非レ是。以ニ出レ字之義。是入レ塵而後出一也。此尊貴位不レ可レ犯。犯即属ニ染汚一。須ニ善回互一。能回互則従レ傍敲顕。有語中無語。

無語中有語。此位後人頌。多用被毛載角。入鄽垂手等語皆非。……惟曹山頌云。未離兜率界。烏鶏雪上行。深得洞上之旨。後有古徳分此一位。為小五位者。最為精密。

としている所よりみると、この位は法身・正位を得る位であり、五位の前二位はその功を転じてこの正位につき、後二位はこの正位を転じて功的に成就せしめるものである。そこでこの位が中間の大尊貴位の故に古轍中の五位図説では「是一位便有五位。」としてこの位がかなめであり全位を含んでいることも主張されているのである。

これに対し顕訣並揀は正中来を「不レ立二尊貴一」「不レ落二左右一」「不レ渉レ縁」ものであることを明かすものであり、正中来で、来は偏位への回互を示すが、それも偏位の体物において正を明すべきことをのべるのであり、正中来の位としては正位の一方究尽の所述ぶべきなしで、遍中至の事相一辺の究尽と相まって不回互を成じ、前二位の回互と相対して、洞上の縝密兼帯の道理を示すものである。この理事俱備兼帯が洞上の悟りの内容であるとしている上から、既述の古轍の説は正中来中心の見性段階禅であると日本の五位復古者からは批判されているのである。

しかし古轍の説を仔細にみると、正中来における正から偏への性格を、済門では大慧朝宗ともに正の見性から直に俗に垂手することとしているけれども、それは「出二塵埃一」とする立場であり誤りであるとして、本旨は「隔二塵埃一」でなければならず、正中来の来の偏とはあく迄も正位内の転身でなければならぬ。この尊貴位は入鄽入俗の染汚を蒙りそれと混じてはならぬもので善く回互して傍より敲顕する以外にないものである。その上からは有語中無語・無語中有語であるとするもので、正中来全体としては、曹山の五相偈の正中来や、宏智の四転霊機等の正位裏の転身を強調するもので、正位と偏位を隔別視することなく、正中来一位内の理事の平等俱備、更には正は事によって顕わるるのみの上から事を強調している所がある。

ここには正しく済宗の見解に対して洞上宗義の主張が見られるといってよいであろう。

所でこれもよく見ると、その事重視の如きも正中来を有語中無語、無語中有語と回互を表にだしていっているのは、顕訣が無語中有語といってあく迄も不回互を中心に説いていることからみると、矢張り正位を理事正偏の根本原理としてみるもので、洞門の一方究尽的にみるのよりも縁に応じて直ちに回互をのべてその機用の自在をのべるを重んずる済門的傾向があるように思われる。

これは古轍のひく宏智の四転霊機や曹山の五相偈の全体にうかがわれる古轍の解釈が、理を中心にして悟っていく功勲

的色彩の強いものであり、功勲五位説では更にそれが明瞭となっていることを考えあわすと、結局理事の円具の故に事を重んずる傍提不犯諱という意義が徹底されていず、理を特に重んずる理事の隔別的性格は払拭されていないのではないかとしか思われないであろう。

これは甚だ遺憾であるけれども、これが古轍の一限界と思われるのである。それにしてもこの様に正中来について正位を犯さずの理事の平等相即についてのべているのは、済宗の五位説には見当らず、ここに永覚の復古性の一端がうかがわれるといってよいであろう。

兼中至・兼中到について　古轍では

兼中至。就二功位斉彰時一立。正既来偏。偏必兼レ正。作家相見之際。明暗交参。縦奪互用。……此乃他受用三昧。即是透法身。即是大機大用。

兼中到　就二功位俱隠時一立。前兼中至雖二偏正交至一。猶有二偏正之迹一。此則無二迹可レ見。故曰不レ落二有無一。蓋是造レ道之極。及二尽今時一。還レ源返レ本。……如三仏説二究竟涅槃義一。乃自受用三昧也。既得二此三昧一。雖二大用繁興一。総不レ出レ此。

としているのによれば、偏中至は正の法性とそれによる偏の功勲が俱に現われた時で、正中来の正位の理の悟から衆生済度へと展開したものであり、他受用三昧であると功勲的にみ、又兼中到はそれの至れる立場で、功も位も修も証も容れつつ、その跡ものこさぬ徹底した立場で、自受用三昧といわれるものであるとするのである。

これは顕訣でみると、兼中至ではなくて偏中至で、偏の物について体・理・正を顕わしてゆく立場であり、兼中到は兼帯で一位に一切位が収まっているとすることから、上来の四位が、偏正・有無にとらわれぬ、かたよったものでないことを再びのべて統括するものであるとしており、古轍の正偏の俱在の上から功勲的にみてゆくのとは全く異なるのである。しかしてこの功勲的性格を洞山の功勲五位と比較すると、兼中至にあたる共功が功の跡をのこし、兼中到にあたる功々が功の跡も滅した所とするのは似ているが、他受用・自受用と自他に区別した説はない。即ち、洞山の功勲が「混然無二諱処一。此外復何求」で功勲自体も含めて自他理事功位に落ちざることをのべているのに対して、古轍が「雖二大用繁興一。総不レ出レ此（自受用三昧）」。として功勲の根本原理の獲得の如くみているのは、そこに矢張り理事の隔別的見解が現われているといってよいのではあるまいか。

所でこの自受用・他受用の両三昧の説は、大慧にはなく、朝宗にはじめて現われてくるのであるが、朝宗は兼中至の他受用三昧は臨済の三玄であり、兼中到の自受用三昧は臨済の三要である或いは他受用三昧は三玄の第二位体中玄であり、

自受用三昧は第三位の玄中玄である、としているのに対し、古轍は兼中至の他受用三昧は三玄三要であるとし、兼中到の自受用三昧はその跡も滅した所である、と強調しているのは、五位における宗乗の徹底没縦跡の自覚の一端を示すものであろう。

又大慧が兼中到を結局「帰二正位一」ことと、とらえているのに対して、古轍が功位俱泯でとらえているのは、前来の理事俱備的性格の主張でみられると同じ綿密の性格を把握しのべようとしたものであることがうかがわれるのである。

以上みてきた如く、古轍には臨済の諸師よりも偏正を功勲的に解釈しようとする点があると同時に、曹洞門的な理事不二を重んじ、正位の諱を犯さぬという宗義の傍提的特質を宣揚しようという復古的性格も明らかにみられる。これについてはその師にあたる雲棲袾宏が当時の弊風に応じて、見性一片の済門的説明をしつつ、且つそれよりも儀式祈禱の説を多くなし実践をしていたのに対してみると、永覚はその広録などでは純禅的或いは曹洞的な修証の復古主張が著るしいところに更によく以上のことが知れるのである。

三　おわりに

右にあらわれた永覚の五位の特殊な性格の理由を考えてみるに、永覚はその広録のいたる所で、「曹洞・臨済の両宗共に末世となり濁智に溢れ、曹洞は廉纖となっているから妙悟を強調し、臨済は険怪粗笨となっているから、これに仔細綿密を教えて救わんとするのが自分の使命だ」とのべていることからして、右の妙悟功勲を強調しつつ、曹洞的な綿密を高揚しようとしている所以が知られる。

永覚が右の様に当時の一般的禅風の上から曹洞臨済一致を説きつつ、更にその曹洞宗に属する上から、曹洞宗義を卓上せんとしてなしたのが洞上古轍なのである。此故に江戸初期の宗義混淆期にありつつ宗義自覚の胎動期にあった日本曹洞宗門に大いに迎えられ、独庵等からはその出生は釈尊の天竺の誕生にたとえられたり、或いはその力量は大慧以上だと賞讃されたのであろう。この理解や影響が宗統復古の偉業完遂に与って力あったといえよう。

しかし真の宗旨の理解には不十分であったことは以上にのべた如くであり、曹洞五位も中国では永覚以後再び曹洞禅の衰微純禅の衰退と共に影を没して了ったようである。従って古轍が渡来する直前頃の日本の五位理解が単に済門的である所か、煩瑣な易学的民間信仰的なものに堕していたのを実践実究を尊ぶ禅門的曹洞門的なもの中心へと刮目せしめた功績は特筆すべきものと思われる。

江戸期ではこの五位は宗門の自由思想家的傾向のある天桂禅師により、その顕訣主体の立場から済門的性格を斥けんと

して古轍の正中来中心説が批判され、第五位の兼中到中心であることが明らかにされたが、未だ十分ではなく、結局面山・指月・洞水等の高祖の嗣法・禅戒・清規やそれをのべた眼蔵等の偏位面における重大な真義に熟達された方々によって始めてその真義が理解宣揚されてきたのである。

ということは翻ってみれば、高祖は五位については、仏道は五位の如き辺局に拘わるべからず、として殆んど用いられていなかったけれども、仏道の至極としての洞山の五位の真義をとらえられ、それを日本の土壌で種々の儀軌や眼蔵等で巧みに展開されていたから、それらの刊行流布理解に基き、結局江戸時代中期の右の祖師達により、洞山五位の真義も漸く開顕されてきたのである、ということだと思う。

南英謙宗や傑堂能勝の両禅師その他の五位復古も知られているが、なお種々宗義上から疑念をいたされているのも、この顕訣はあったが眼蔵等は隠れて了っていた理由によることが大なのではないかと推察されるのである。

古轍が済門的理解の傾向が強かったのも、顕訣をみる機会に恵まれなかったことによると思われるが、それにつけても永覚の宗義自覚の独自性がしのばれよう。

それはさておき、現今の曹洞宗門が本証儀軌一片の強調に終る傾向があり、更に儀規が強調される程には儀軌への信が堅くない等、種々批判されているのは、右の眼蔵の偏正功勲を一貫した自覚が、眼蔵についての誤まれる見方から五位軽視と結びつき、江戸時代以後の形式化と共に五位を偏正のみに限り、単に理論的に解釈して五位全体への顧慮が薄らいできていることにも関係があろう。又この逆に、宗門では未だに偏正五位も済門的に段階的にしかみぬこともあるといわれている。これは顕訣並びに眼蔵の宗義の宣揚を無視するものであることはいうをまたない。これらの欠陥は正しく、永覚が洞門の廉織、済門の粗笨といった批判にあたるものであろう。永覚自身はその自説においてその批判に十分に応え得たとはいい難いのだけれども。

現今の宗学は内に向って論理的に緻密に分析してゆかねばならぬは勿論、それに就ては他派に対して宗義を明確にし、その疑難にこたえるようなものであることが必要であるともいわれる。この意味で洞済両宗乗にたちつつ、曹洞宗義を挙揚せんとして、現今の宗乗に直結する江戸期の宗乗の自覚に影響を与えた、古轍の複雑な五位の性格を仔細に分析し、微細にその長短を見極めることは、右の宗学の傾向に沿い、且つ現今の我々の前述の短所を補って益すること大なるものがあると思われるのである。

（註略）